

浜の活性化と後継者育成を目指して

— 幅広い青壮年部活動への取り組み —

相馬原釜漁業協同組合

青壮年部 立谷 義 則

1. 地域と漁業の概要

相馬原釜漁協は仙台湾に面した福島県北部に位置し、正組合員は473名である。沖合底びき網34隻、さし網や船びき網を主とした小型船が約180隻あり、カレイ類をはじめとした底魚類を主に漁獲している。平成12年の水揚げは約40億円であった。当漁協は古くから資源管理に取り組んでいるが、単なる漁獲規制に終わらず、市場での販売方法の改善、魚価向上のための各種取り組み、休船日の設定など複合的な資源管理を実践し成果をあげている。

2. 活動グループの組織と運営

相馬原釜漁業協同組合に所属する若い漁業者により構成され、部長以下15名の役員を含む78名の部員がいる。部の構成は、全体を親会と称し、その下部組織として底びき部会と小型部会に分かれ、小型部会はさらに刺網部会、漁具漁法研究会に分かれている。また、活動によっては産直研究会やパソコン部会などが組織され、より専門的な活動を行っている。全体の活動はもちろんのこと、それぞれの部会においても部会長などの役員を中心に活発な活動を展開している。

3. 実践活動課題選定の動機

漁業を取り巻く環境は、資源の減少や魚価の低迷による水揚げの減少、後継者不足など厳しい状況が続いている。そこで、実行力のある私達若い漁業者が、魚価の向上、資源管理や栽培漁業、地域活動などに取り組むことによって、漁業経営の向上と浜の活性化が図れるのではないかと考えた。また、これらの活動を通じて後継者の育成も図ろうと考えた。

4. 実践活動の状況及び成果

私達は様々な側面から活動を行ってきた。ここでは、主な活動内容について紹介する。

(1) 魚価向上への取り組み

最近の魚価の低迷によって、私達の漁業経営を厳しいものとなっており、現在の青壮年部活動において最も力を入れている課題である。これまでは獲って売だけの漁業であったが、これからは獲った魚を如何に高く売るか、また、消費者はどのような魚を望んでいるのかを考えることも必要である。

この取り組みは平成7年から本格化しており、魚まつりをはじめとした産直活動によって相馬の魚の美味しさPRしてきた。平成12年度からは青壮年部のホームページを立ち上げ、全国へ向けて地域情報を発信し、より広範囲へ相馬のPRを行っている。そして平成13年度からは中核的漁業者協業体の認定を受け、鮮度向上や簡易加工による付加価値形成、産直の強化等に取り組んでおり、成果が上がり始めている。また、これらの活動は、単なるPRだけに終わらず、常に消費者の意識について調査を行い、消費者が何を求めて

いるかを把握して活動の方向性を考えながら活動している。

(2) 栽培漁業、資源管理型漁業の推進

相馬原釜では、ヒラメをはじめとして、古くから資源管理や栽培漁業に取り組んできた。これらの取り組みの中心となったのは私達若い青壮年部であり、勉強会などを通して、資源管理の必要性について理解するとともに、それらを地域へ広める原動力となった。また現在行われているヒラメの栽培漁業では、青壮年部が種苗放流作業を実施しており、栽培漁業の重要性を肌で感じている。平成14年度からは、新しい栽培漁業対象種として期待されているホシガレイについて、漁業者の立場から出来ることをしようではないかと、水産試験場で行っている種苗放流への協力や採捕調査などを実施し、活動を通じてホシガレイの栽培漁業実現へ向けて普及啓発を行っている。

(3) 環境問題への取り組み

環境問題はこれからの大きな活動となっていくことが予想されるが、私達は海から生活の糧を得ているので、率先して環境保全に取り組まなくてはならないと思う。

ゴミ問題については、岸壁や海浜清掃に加えて、港内の海底掃除を実施している。この活動は今年で9年目となり、底びき部会によって行われている。漁船で「ウチカキ」と呼ばれる鉤状のものを曳き、ゴミを引っ掛けて回収しており、漁業技術を活用しての作業である。活動を始めた当初は、トラック数台にもおよぶゴミが回収されたが、活動の継続によって毎年ゴミは減少してきており、回収による直接的な効果と活動を継続することによる抑止効果の表れだと思う。しかし、残念なのは、回収されるゴミの多くが漁業資材であることで、今後はゴミを出さないための啓発運動が必要である。

漁場環境については、水産試験場と連携して月1回の水質調査を実施し、漁場の環境状態を把握している。また、漁場の回復を目的として、平成14年からは藻場造成にも取り組み始めた。私達の中にはウニやアワビ漁を営む者もいるが、近年これらの漁場において磯焼けが発生し漁場が減少している。このため人工的にアラメ等の採苗や養殖を行い、これを漁場へ移植することで漁場の復活を図ろうと考えている。今年の春には漁場へ移植する予定となっており、今から期待が膨らんでいるところである。

(4) 後継者育成

漁業技術や知識の向上を目的に、県外への研修やパソコン研修、勉強会を行っている。

県外への研修は各部会単位で行っており、最近の例では、インターネットの研修（南伊豆町）や、網なりの水槽実験研修（下関市）、加工技術研修（石巻市）などを行っている。これらの視察研修による他の漁業者との交流は、知識を得るだけでなく、刺激にもなり青壮年部活動にとっても大変意義がある。なお、これらの研修には県などからの助成の他、コンブの養殖に取り組み、この販売利益を活用し研修費用に当てている。

研修会や勉強会では話題性のあるテーマを選定し、水産試験場や水産事務所、漁協の方に講師になって頂き、水産試験場の調査結果や水場状況、パソコン、漁協合併などについて勉強し、知識の向上を図っている。特にパソコン研修は昨年よりPC部会が設立されたこともあり、今後も漁業経営に役立てるよう勉強していきたい。

5. 波及効果

それぞれの活動では、取り組みの目的によって直接的な成果はもちろん得られている。しかし、一番の活動効果は私達の活動が浜の活性化に繋がり、新しい漁業後継者も入って

きていることである。青壮年部の年齢構成を表1に示したが、20代から40代までバランス良く構成されていることがわかる。漁業の世界では、後継者不足が大きな問題となっているが、私達の浜では他の地区から見れば、まだまだ後継者が多く、これは活力のある浜づくりに取り組んでいる成果ではないだろうか。

また、青壮年部活動は後継者の育成に大きな役割を果たしている。後継者育成と一言でいっても、いろいろな意味合いがあり、青壮年部の役職に就いている人達は、近い将来に漁協や地域のリーダーとなる場合が多く、青壮年部の運営は、より上の組織のリーダーになるための後継者育成にも繋がっている。また、若い20代から中堅どころの40代までが一緒に活動することで、先輩から後輩へ漁業技術や知識などが受け継がれるし、同じ年代で見れば、お互いの情報交換の場ともなっている。

6. 問題点と今後の対策

現在は20代の若い部員もいるが、将来を考えると新規就業者は減少してくることが予想される。今後はさらに活発な活動を展開するとともに、若い漁業者の考えを漁協や地域に反映させて、若い人にとって魅力ある浜にしていきたい。

また、近い将来には近隣の漁協との合併も控えており、合併後の漁協運営をより良いものにしていくには、他の地区の青壮年部との交流も一段と重要となってくる。今後は広い視野に立った活動を心がけ、漁業全体の発展ためにがんばっていきたい。

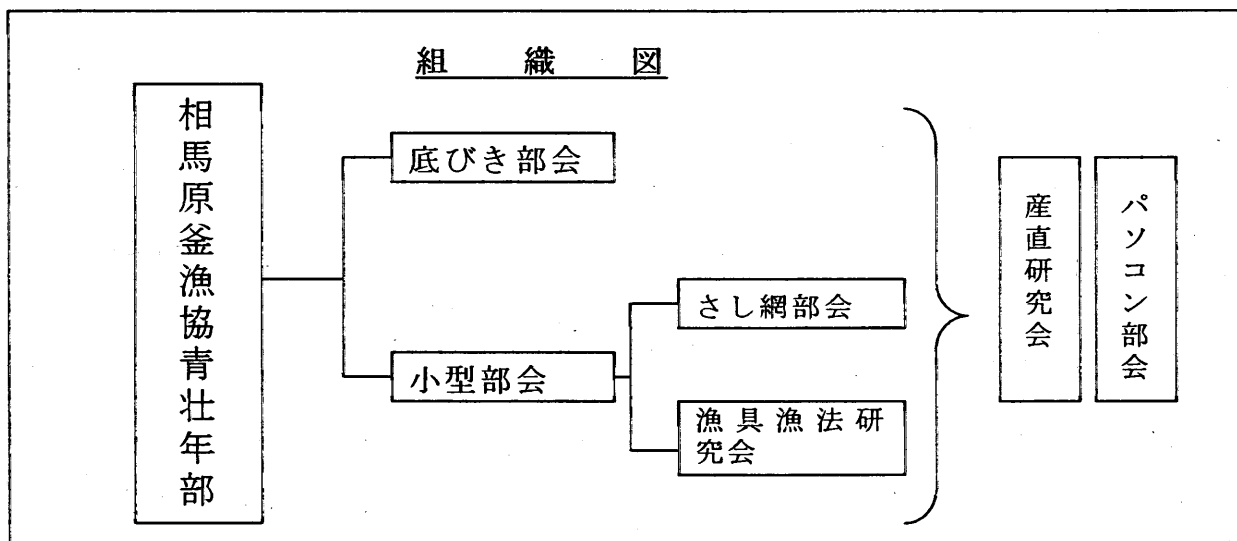
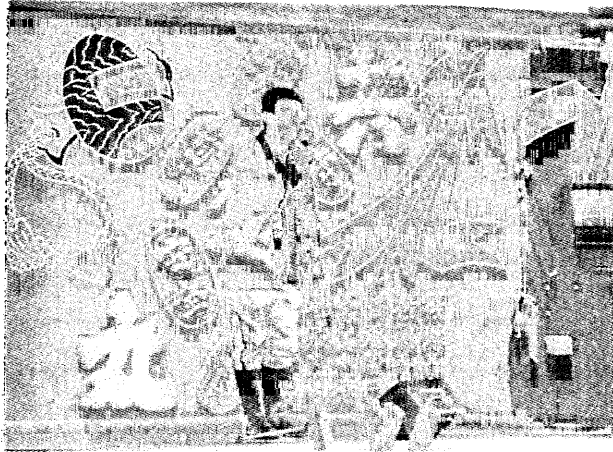


表1 青壮年部の年齢構成

年齢	人数	(%)
20才以下	2	(3)
21-25	11	(14)
26-30	10	(13)
31-35	8	(10)
36-40	23	(29)
41-45	15	(19)
46-50	9	(12)
	78	



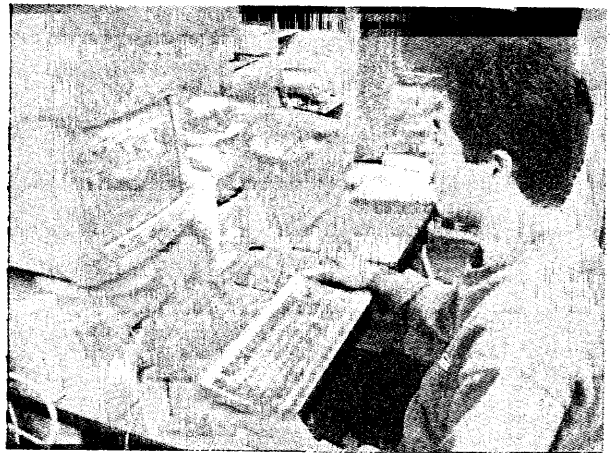
魚まつり



福島物産館での産直



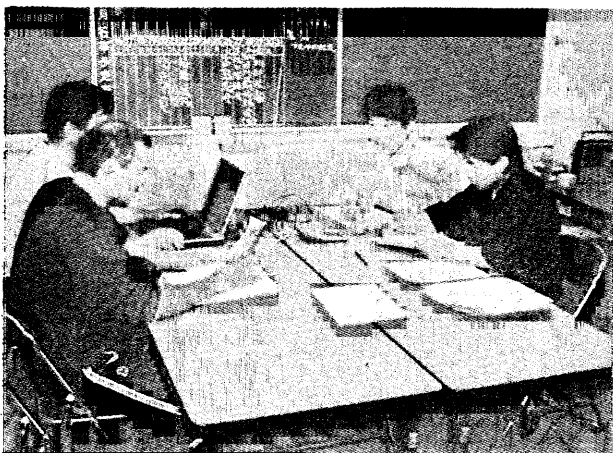
伊達町でのズワイガニPR



インターネットでの情報発信



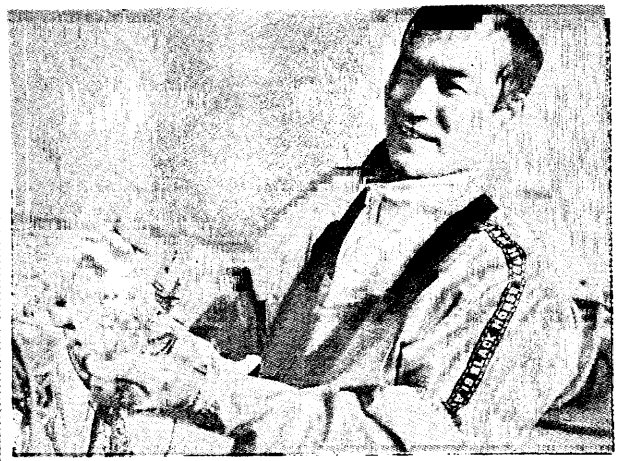
県庁でのアンケート調査



アンケート結果の集計と検討会



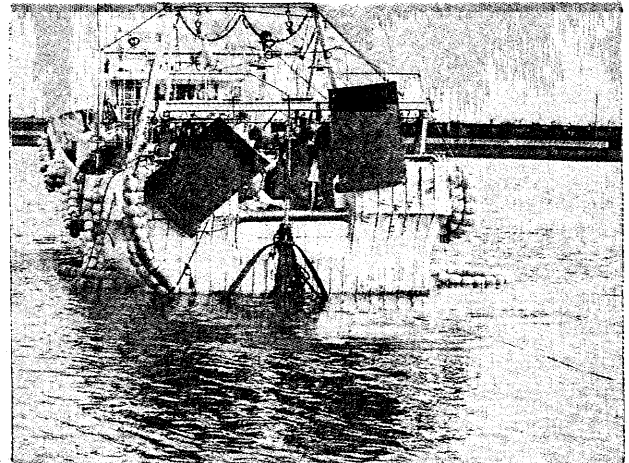
種苗放流



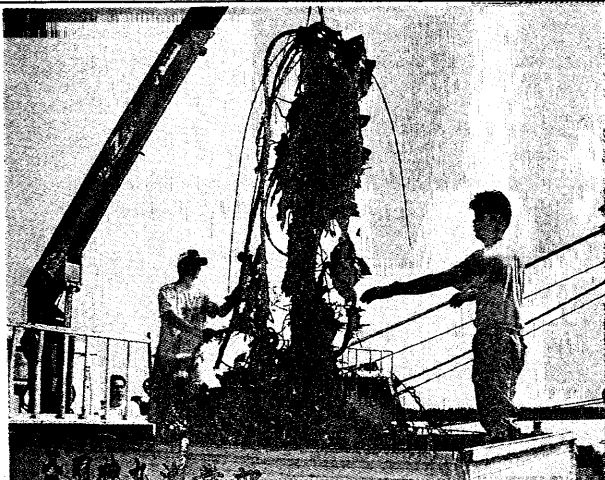
ホシガレイ採捕調査



獲れたホシガレイを水試で測定



海底のゴミ清掃



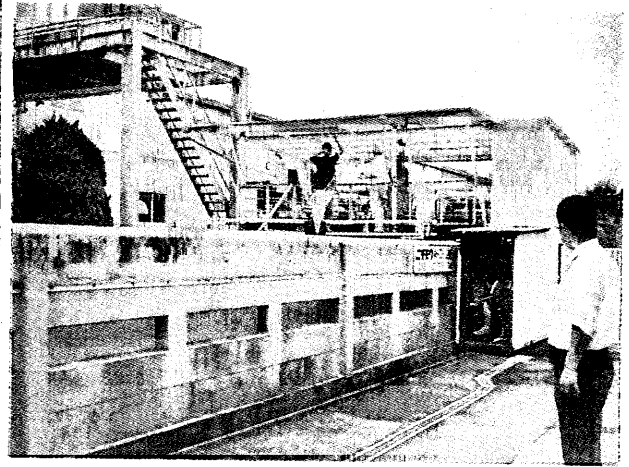
回収されたゴミ



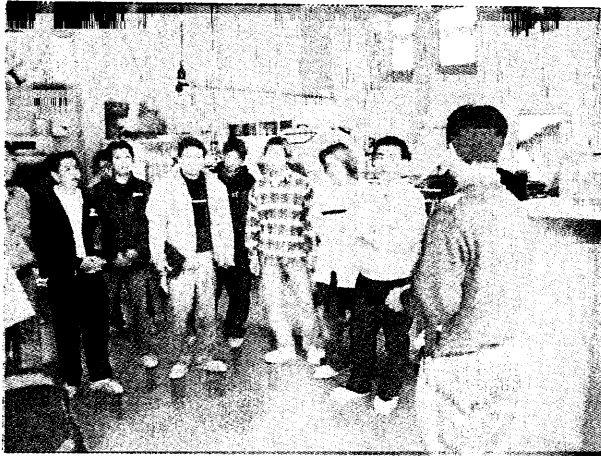
水質調査（漁場保全調査）



海の森づくり



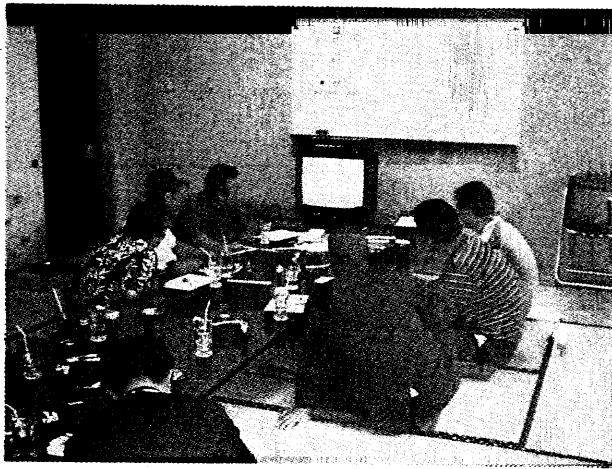
網なりの水槽実験（山口県）



加工技術に関する研修（宮城県）



コンブ養殖に取り組み研修費へ活用



網なりの勉強会



子供達に漁業魅力を説明